

# 「する・やる・行なう」についての構文的分析

## ——意味と用法について——

王 鉄 橋

### 目 次

1. はじめに
2. 意味的構文の特徴
3. 構造的構文の特徴
4. 終りに

#### 1. はじめに

行為を表わす動詞として「する」、「やる」、「行なう」があげられる。三つとも使用頻度の高い動詞である。ところが、使用頻度の高い語であればあるほど、外国人の日本語学習者にとって、その意味をとらえる難しさが大きくなるのである。というのは使用頻度の高い語は場面に応じていろいろな意味にも使われるし、表現意図に応じていろいろな構文にも使われるので、意味的派生が多くなり、それによる文の構成も複雑になるからである。また、外国人の日本語学習者は辞書にたよって学習している人が多いが、しかし、辞典ではその意味と用法について詳しく説明するわけにはいかない。意味と用法の近い類義語になると一層難しく感じられるのである。そういう意味から筆者は本稿で日本語教育の視点から「する」、「やる」、「行なう」といった、常用で意味と用法がとらえにくい動詞をとりあげてそれぞれの意味や用法を考察し、それらの相違点を明らかにしてみたいと思う。

「する・やる・行なう」についての構文的分析—意味と用法について—

標題の動詞の意味、用法を考察するため、関係の論文と辞典を調べ、その中から、代表的な用例を六十数例選び出して、在中国日本学研究センターの日本人教師7名と北京外国語大学の日本人留学生の3名を対象としてアンケートをした。その結果を整理すると、次表のようになる。次表中「◎」は全員が賛成、「○」は三分の二以上の人が賛成、「△」は三分の二以下、半分以上の人が賛成、「□」は半分以下、三分の一以上の人が賛成、「×」は三分の一未満、「#」は全員否定であることを示す。

番号	用 例	する	やる	行なう
1	運動(研究・勉強・授業・いたずら)を～。	◎	○	◎
2	クラス会(研究会・結婚式・試合・講演会)を～。	◎	○	◎
3	バレーボール(ゴルフ・トランプ)を～。	◎	◎	○
4	彼はいろんなことを～たことがある。	◎	○	△
5	彼女はいつもすきなことを～。	◎	○	△
6	あの人はどんなことでも～。	◎	◎	△
7	いうことはやさしいが、～ことは難しい。	◎	○	○
8	これは～ざるを得ないことです。	◎	○	○
9	～だけのことは～た。	◎	◎	△
10	主任(教師・委員・役員・世話役・相手・百姓)を～。	◎	○	×
11	店屋(魚屋・商売・旅館)を～。	◎	○	□
12	期待(法規)に反～。	◎	#	#
13	あの二人は握手(を)～て仲直りした。	◎	×	#
14	あの人は大学で外国語の勉強を～ている。	◎	○	○
15	結婚(卒業・信用)を～。	◎	#	×
16	注意(心配・ひいき・感心)を～。	◎	#	×
17	途中、十分間の休憩を～た。	◎	#	×
18	温泉地で一ヶ月の休養を～た。	◎	#	×
19	あくび(くしゃみ・げっぷ・しゃっくり)を～。	◎	×	#
20	君は骨折(火傷)を～た経験があるか。	◎	×	#
21	かわいい顔を～た赤ちゃん。	◎	#	#
22	彼女はとても澄んだ目を～ている。	◎	#	#
23	赤い屋根を～た建物。	◎	#	#
24	栓を～た瓶。	◎	#	#
25	贅沢な服装を～た貴婦人。	◎	#	#
26	金持ちのふりを～ているが実は文無しなのだ。	◎	×	×
27	穏やかな心を～た人。	◎	#	#
28	犬が首輪を～ている。	◎	×	#

29	とてもいいにおい(味)が～ますね。	◎	#	#
30	いい音(歌声・笛声・鳥の鳴き声)が～ます。	◎	#	#
31	いなづま(地鳴り)が～。	◎	#	#
32	めまい(痙攣・悪寒・寒け・吐き気・胸さわぎ・いやな予感)が～。	◎	#	#
33	一個千円も～。	◎	#	#
34	もう少し～たら医者がきます。	◎	×	×
35	新婚旅行はハワイに～よう(う)。	◎	#	#
36	ぼくはうなぎに～ます。	◎	#	#
37	息子を大学に～。	#	◎	#
38	この本を妹に～。	#	◎	#
39	来週テストを～よ。	○	◎	×
40	よく～ているね。	△	◎	×
41	この給料じゃどうしても～ていけねえや。(作例)	#	◎	#
42	一杯～う。	#	◎	#
43	あいつを～ちまえ。	#	◎	#
44	寝込みを～(ら)れた。	#	◎	#
45	契約を～。	○	×	◎
46	任務を～。	×	×	◎
47	洗濯(後悔・はちまき・夕涼み)を～。	◎	#	×
48	どろぼうを～。	◎	△	×
49	インチキを～。	◎	○	×
50	千円札を細かく～。	◎	#	#
51	目を真赤に～て泣いている。	◎	#	#
52	息子を医者に～。	◎	#	#
53	患者に注射を～。	◎	#	×
54	彼女に電話を～。	◎	×	×
55	先生は学生に本を読ませたり質問に答えさせたり～ます。	◎	#	×
56	土地一寸たりとも敵に侵犯させは～ない。	◎	#	#
57	教室であてられは～ないかとひやひやしていた。	◎	#	#
58	大学は商学部～たい。	◎	#	#
59	私たちはボートを借りることに～た。	◎	#	#
60	ああ～て生きていく。	○	◎	×
61	どう～たらもうかるか。	○	◎	×
62	国会は議事堂で～れた。	×	□	◎
63	この風習は今では世に～れなくなった。	□	×	◎

表注) 用例は作例を除いて『基礎日本語』(森田良行)、『日英語比較』(安田滋)、『する・やるの使いわけ』(李奇術)、『日本語教育辞典』(日本語教育学会)、『例解新国語辞典』(林四郎ほか三名)から取ったものである。

次に、まず意味から分析して、それから構造的にも考えてみよう。

## 2. 意味的構文の特徴

### (1) 「する」の特徴

「する」は、動詞の中ではもちろん、日本語全体の中でも最も基本的な単語の一つである。その使用度数は多種の刊行物を対象とする語彙調査では上位八位以内にあるのである。「する」は他動詞であるし、自動詞でもある。状態をも表わせるし、行為、動作をも表わせる。意志的行為にもなるし、無意志的行為にもなる。使用範囲は「やる」「行なう」よりずっと広いわけである。以下に「する」の意味的構文の特徴および「やる」、「行なう」との使いわけを考えてみよう。

#### 〈1〉他動詞として意志的な行為を表わす場合

##### A. 日常の動作、行為、活動を表わす名詞を目的語(対象語)とする場合

- ① 運動(研究、勉強、授業、いたずら)をする。〈やる○ 行なう◎〉
- ② クラス会(研究会、結婚式、試合、講演会)をする。  
〈やる○ 行なう◎〉
- ③ バレーボール(ゴルフ、トランプ)をする。〈やる◎ 行なう○〉

①②③の行為はいずれも意志的、具体的な行為と活動を表わすものであるから「やる」、「行なう」で置き換えられるのである。ただし、「やる」、「行なう」を使うと、意味合いの違いは少しでもある。これについては後述する。

B. きまった対象がなく、広くてばくぜんとしたことを表わす場合

- ④ 彼はいろんなことをしたことがある。 <やる○ 行なう△>  
⑤ 彼女はいつもすきなことをする。 <やる○ 行なう△>  
⑥ あの人はどんなことでもする。 <やる◎ 行なう△>

④⑤⑥の対象がきまったことでなくなると、ことばがぞんざいになるので、俗っぽい「やる」がよく使われることになったのであろう。「行なう」は後述の意味的特徴によって絶対に使わないとは言えないが、ばくぜんとしたことにはあまり使わないようである。

C. 「何かをする」という意味での行為そのものを表わす場合

- ⑦ いうことは易しいが、することは難しい。 <やる○ 行なう○>  
⑧ これはせざるを得ないことです。 <やる○ 行なう○>  
⑨ するだけのことはした。 <やる○ 行なう△>

「何かをする」という意味での行為そのものを表わし、別に目的語がない場合、いずれも使えると思う。ただし意味上と文体上の制限で「行なう」はときに使えない場合がある。

D. 役職や身分や役割を目的語（対象語）としたり、商売、企業などを目的語（対象語）とする場合

- ⑩ 主任（教師、委員、役員、世話役、相手、百姓）をする。  
<やる○ 行なう×>

⑩ 店屋（魚屋、商売、旅館）をする。 <やる○ 行なう□>

⑩⑪の「する」は「やる」で置き換えられるが、「行なう」で置き換えられにくい。その原因は、「行なう」が後述のように「役職、身分、役割」などのような予定した順序や筋道のないものを目的語（対象語）としないことであろう。「商売、店屋、旅館」などは運営することがらに取られるときもあるが、アンケートによれば、やはり「行なう」があまり使われないようである。

#### E. サ変動詞の場合

⑫ 期待（法規）に反する。 <やる# 行なう#>

⑬ あの二人は握手（を）して仲直りした。 <やる× 行なう#>

⑭ あの人は大学で外国語の勉強をしている。 <やる○ 行なう○>

サ変動詞語幹につく「する」は接尾語のようなもので「やる」、「行なう」は接尾語の性質がないのである。また⑫から⑭へと、サ変動詞語幹と「する」との熟合度が低くなるにつれて、自立性の強い「やる、行なう」との置き換えが可能になってくる。⑭の「する」は実際には自立語の「する」になっているのである。

#### F. 抽象的な行為、精神活動を表わす名詞を目的語（対象語）とする場合

⑮ 結婚（卒業、信用）をする。 <やる# 行なう×>

⑯ 注意（心配、ひいき、感心）をする。 <やる# 行なう×>

⑮の「結婚」などのような語は抽象度の高い名詞なので、具体的な動作、行為を表わす「やる」、「行なう」との共起性が弱いと思われる。しかし、「結婚・卒業」のあとに「式」のような接尾語がついたら具体的な名詞になって、「やる」「行なう」が使われるようになる。⑯の「注意」などのような語は精神的な活動で内面的な心理や状態を表わすものであるから、行為を表わす「やる」「行なう」で置き換えられないのである。

G. 静的な状態や行為を表わす名詞を目的語（対象語）とする場合

⑰ 途中、十分間の休憩をした。 <やる# 行なう×>

⑱ 温泉地で一ヶ月の休養をした。 <やる# 行なう×>

「やる」「行なう」は動作性の強い動詞であり、とくに「やる」は動的な性質が強いので、静止した状態あるいは行為を表わす場合には使われないようである。

<2> 他動詞として無意志的な行為を表わす場合

⑲ あくび（くしゃみ、げっぷ、しゃっくり、おなら）をする。 <やる× 行なう#>

⑳ 君は骨折（火傷）をした経験があるか。 <やる× 行なう#>

⑲は、いずれも動作性の生理現象であり、場合によって意志的な行為にもなるが（例えば「わざとあくびをして逃げようと思ったが…」）、無意志的な行為が普通である。⑳は、傷害を受けた経験を問う場合の無意志的行為なので、意志動詞の「やる」「行なう」で置き換えられないのであ

る。

〈3〉 他動詞として無意志的な状態を表わす場合

- |   |                        |            |
|---|------------------------|------------|
| ⑳ | かわいい顔をした赤ちゃん           | 〈やる# 行なう#〉 |
| ㉑ | 彼女はとても澄んだ目をしている。       | 〈やる# 行なう#〉 |
| ㉒ | 赤い屋根をした建物              | 〈やる# 行なう#〉 |
| ㉓ | 栓をした瓶                  | 〈やる# 行なう#〉 |
| ㉔ | 贅沢な服装をした貴婦人            | 〈やる# 行なう#〉 |
| ㉕ | 金持ちのふりをしているが、実は文無しなのだ。 | 〈やる# 行なう#〉 |
| ㉖ | 穏やかな心をした人              | 〈やる# 行なう#〉 |
| ㉗ | 犬が首輪をしている。             | 〈やる× 行なう#〉 |

㉑ ㉒ は人間の体あるいは体の一部の様子を表わしているが、㉓ ㉔ は物の状態を表わしている。㉕ から ㉖ は主体の意志的な要素がはいっているが、文脈的に分析すれば無意志的な表現で、状態を表わすのが原義であろうと思う。

以上見てきたように、他動詞としての「する」は、同じように他動詞である「やる」「行なう」と意味的な違いがあるので、文脈によって「やる・行なう」と置き換えられる時もあるし、置き換えられない時もあることが分る。次にあげる自動詞の例になると、いずれも置き換えられないものと思われる。



## (2) 「やる」の意味特徴

「やる」は「する」の俗語だという説があるが、以上の考察で分るように、無意志的な状態や行為を表わす「する」とは意味的に全然ちがう。例えば、⑬から⑯までの例は全部「やる」で置き換えられない。意志的な行為を表わす場合にも置き換えられない例がある。例えば、⑮⑯がそれである。したがって、「やる」は「する」の俗語だと説明するだけではすむものではなかろうと思う。次に「やる」の意味特徴を考察してみよう。

「やる」は、森田良行氏の『基礎日本語』の記述によれば「やる」を一括して「あちら側へと進ませる意志的行為」と定義されている。歴史上の「やる」をふりかえてみると、確かにもともとの意味として物や人間をあちらへ移動させたり派遣したりする意味であった。『例解古語辞典』『明解古語辞典』を調べると、何れも第一義はその意味である。その例として『明け暮れ見慣れたるかぐや姫をやりては、いかが思ふべき』とある。これは「やる」の基本的な特徴であると思う。しかし、何となくこれだけでは現代語の「やる」を説明しにくいところがあるような気がする。上述の意味で

⑳ 息子を大学にやる 〈やる# 行なう#〉

から、

㉑ この本を妹にやる。 〈やる# 行なう#〉

へと変わる過程を説明することができるが、「文学をやる」「一杯やろうか」を説明する時に「～に」格が設定されないという構文的説明だけでは理解しにくいのではないかと思う。

この場合、意味論的にも説明せざるを得ないと思う。「やる」の意志的、主観的な性質から派生してきたのではないかと思う。「やる気満々」「やる気がないものか」の「やる」は「する」で置き換えると感じがちがうであろう。

次に「する」「行なう」に対する「やる」の意味的特徴を筆者の考察によってあげてみよう。

<1> 「やる」は意志的動作、行為を表わす動詞で無意志的な動作、行為、状態を表わさない(図3参照35頁)。例えば、⑬⑭の「する」は、いずれも「やる」で置き換えられない。

<2> 「やる」の動作性が強い(図3参照)。⑰⑱に「やる」が使えないのはそのような原因からであると思う。

<3> 「やる」は具体性が強い。抽象語、精神活動を対象としないようである(図2参照35頁)。⑮⑯に「やる」が使えないのはそういうわけであろうと思う。

<4> 「やる」は口語的、ぞんざいである(図3参照)。

⑲ 来週テストをやるよ。 <する○ 行なう×>

⑳ よくやっているね。 <する△ 行なう×>

⑲は話し言葉でぞんざいな言い方なので、口語にでも文章語にでもなる「する」は使えるが、文章語的な「行なう」を使うと不自然になる。⑳は口語的である上に慣用的であるから「行なう」が使えないし、「する」

も使いにくい。

〈5〉 「やる」は、「行なう・する」より俗語的、意欲的である（図3参照）。

- ④① この給料じゃ、どうしてもやっていけねえや。〈する# 行なう#〉  
④② 一杯やろう。 〈する# 行なう#〉  
④③ あいつをやっちなえ。 〈する# 行なう#〉  
④④ 寝込みをやられた。 〈する# 行なう#〉

④①④②は俗っぽくて方言の「食べる・食う」の意味もあるから「する・行なう」が使えないのであろう。一方、④③～④④は俗語的で慣用的なもので、また意味的な派生があるので「する・行なう」で置き換えられないのであろう。

〈6〉 「やる」は独立性が強い。接尾語的、形式的な使い方はあまりないようである（図4参照）。④②④③には使われないのもそのためであらう。

### （3）「行なう」の特徴

「行なう」については、現代日本語の辞書にほとんど、ほぼ同様な説明がついている。例えば『三省堂国語辞典』には「〔決められた順序、計画などにしたがって〕物事をする」とある。ところが、現代語の意味が多少とも古語とつながっているという通時的な考え方によって手元にある古語辞典を二、三冊調べた。それにも「一定の手順を踏んで、あるいは作法どおりに事をする」（例解古語辞典）、「物事を一定の方式にしたがって

処理する」(広辞苑)と書いてある。『新明解古語辞典』と『学研古語辞典』には、ただ「する・なす」とは書いてあるが、例はそういう意味に合うものが出してある。また、『源氏物語大成索引』を用いて、『源氏物語』に出てきた「行なふ」40例を調べたら、三分の二ぐらいの例は形式ばった事柄或いは仏事を対象語としているものであることが分った。そのほかに別の意味もあるが、多くはすたれたり、かわったりして、この基本語義だけがほとんど変わらずに残ってきたのである。

現代語としては35と39ページの図2、3、4のように意味づけができるかどうか、またアンケートを見てみよう。

アンケート表に示したように、①②③⑦⑧⑭に「やる」、「する」と置き換えられるようになっているが、意味的にも文体的にも差異があるものである(図2,3,4参照)。次に「行なう」の特徴をあげてみよう。

〈1〉「行なう」は「何をする」の意味で、意志的な行為であると同時に意識的にある形式や慣例にしたがって、あることをする行為である。例えば、①②では「やる」より「行なう」を使う方がより自然であろう。それは「会議」「授業」はきまった形式や手順がある行為だからである。また③⑦⑧のように「行なう」を使うと形式ばった感じがでてくる。

〈2〉「行なう」は「する」、「やる」より文章語的で丁寧な表現によく使われる。例えば、⑨⑩の場合、「する」「やる」が使える口語文には、「行なう」が使われると不自然に思われるであろう。

〈3〉「行なう」はまた「実行する」、「実施する」、「行使する」、「果たす」の意味があるので、この場合「する」、「やる」で置き換えられない。例えば

- ④⑤ 契約を行なう。 <する○ やる×>  
④⑥ 任務を行なう。 <する× やる×>

④⑤の例には「する」が使えても意味がちがっていて「契約を結ぶ」という意味になる。

<4> 「行なう」は事柄（筋道や順序のある事柄）を目的語（対象語）とするのが多いようであり、例えば①②③の目的語がそれである。手順のない動作や物が目的語になりにくい。例えば

- ④⑦ 洗濯（後悔・はちまき・夕涼み）をする。 <やる# 行なう×>

<5> 「行なう」は公然とした行為を表わす場合が多く、こっそりと、人に見られたくないことを目的語（対象語）とすることが少ないようである。

- ④⑧ どろぼうをする。 <やる△ 行なう×>  
④⑨ インチキをする。 <やる○ 行なう×>

#### (4) まとめ

<1> 「する」の意味範囲が広いが、「やる」「行なう」の意味範囲はやや狭い。また、「する」は具体的にも抽象的にも使われるが、「行なう」「やる」は具体性が強いので、あまり抽象的にはつかわれない（図3）。

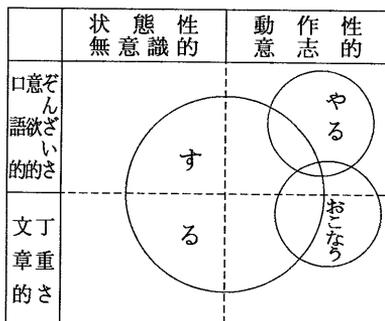
<2> 「する」は状態性もあれば、動作性もある。「する」、「行なう」、

「やる」の順で動作性が強くなる（図2）。

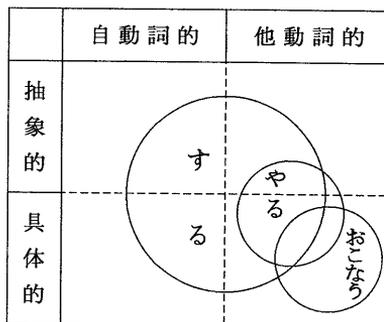
〈3〉「する」は意志的にも無意志的にも使えるが、「やる」、「行なう」は意志的にしか使えない（図2）。

〈4〉「する」は一般的な文体で口語にも文章にも使われる。「やる」は俗っぽい口語的なことばである（図2）。

（図2）



（図3）



### 3. 構造的構文の特徴

三つの動詞の意味的構文の特徴を分析してきたが、次にこの三つの動詞の構造的構文の特徴を考察してみよう。

#### （1） 「する」の特徴

〈1〉 「……を  $\left\{ \begin{array}{l} \text{形容詞語幹＋く} \\ \text{形容詞動詞＋に} \\ \text{人、物の名詞＋に} \end{array} \right\}$  する」

の場合

- ㉔ 千円札を細かくする。 <やる# 行なう#>  
㉕ 目を真赤にして泣いている。 <やる# 行なう#>  
㉖ 息子を医者にする。 <やる# 行なう#>

㉔から㉖は「やる」「行なう」で置き換えられない。その原因として、「やる」、「行なう」は実際の動作、行為を表わし、独立した性質があるのに対して「する」は抽象的動作にもなることがあり、形式的、補助的に使われることがあるからであろう。形式的、補助的に使われる場合、前の「…に(く)」と一緒に一つの行為となると見ていいのではないかと思う。

<2> 「……に(動作性を持つ名詞)をする」の場合

- ㉗ 患者に注射をする。 <やる# 行なう×>  
㉘ 彼女に電話をする。 <やる× 行なう#>

これも「する」の形式性、補助性による現象であろう。動作の成立は目的語によってきまるのであり、「する」はただ形式的、補助的な作用をしているのであろう。㉘の「電話」は「通話」の意であり、単なる名詞ではなく、動作性の強いものである。

<3> 「……たり……たりする」の場合

- ㉙ 先生は学生に本を読ませたり、質問に答えさせたりします。  
<やる# 行なう×>

この場合の「する」も形式的、補助的なものなので「やる」「行なう」で置き換えられないものであると思う。

<4> 「動詞連用形+は(も)+しない」の場合

⑥⑥ 土地一寸たりとも敵に侵犯させはしない。 <やる# 行なう#>

⑥⑦ 教室であてられはしないかとひやひやしていた。

<やる# 行なう#>

<5> 「……は……にする」の場合

⑥⑧ 大学は商学部にしたい。 <やる# 行なう#>

⑥⑨ 私たちはボートを借りることにする。 <やる# 行なう#>

<6> 謙譲表現「お～する」の「する」は「やる」「行なう」で置き換えられない。

<7> 慣用表現の「手にする」、「耳にする」、「口にする」の「する」も「やる」「行なう」で置き換えられない。

(2) 「やる」の特徴

<1> 「……を(場所・人・動物)にやる」の場合、例えば⑥⑦⑧の「やる」は「する」「行なう」で置き換えられない。それは「やる」の移動性、方向性があるからであろう。

〈2〉「(こ・そ・あ)どうやって(たら)……」の場合

- ㉙ ああやって生きていく。 <する○ 行なう×>  
㉚ どうやったらもうかるか。 <する○ 行なう×>

「する」よりくだけた言い方である。この場合の「やる」はごく少ない特例として「こそあど」の副詞と結合して形式化したものになったので、「する」は使えても「行なう」では置き換えられない面白い現象である。

(3) 「行なう」の特徴

「行なう」の主体は大勢の人となる場合が多い。その行為は公然とした、公的な活動が多いので、目的語となる事柄と行為そのものが強調されることがよくある。よく受身形にしてでてくることはそのあらわれである。

- ㉛ 国会が議事堂で行なわれた。 <やる□ する×>  
㉜ この風習は今では世に行なわれなくなった。 <やる× する□>

この場合、「やる」「する」で置き換えると動作主と動作の受け主が強調され、また私的な傾向が強くなるので不自然である。たとえ置き換えられたとしても意味合いが変わってくると思う。例えば「結婚式が行なわれた」の文を「結婚式がやられた」と言ったら、「不本意ながら結婚式が挙行された」或いは「この結婚式は誰かに干渉されて(何か事情があって)取り消された」という意味になるのであろう。

(4) まとめ

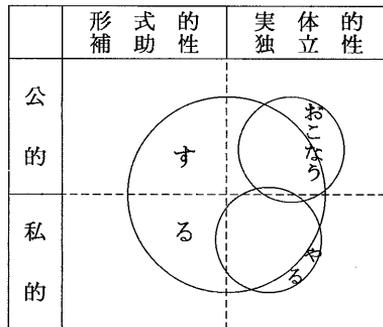
〈1〉「する」は実体的にも形式的にも使われるが、「行なう」「やる」はあまり形式的に使われない(図4参照)。

〈2〉「する」は補助性があるのに対し、「行なう」「やる」は独立性が強いものである(図4参照)。

〈3〉「する」は公的にも私的にもなる行為であるが、「やる」は私的な傾向が強いのに対し、「行なう」は公的な傾向が強い(図4参照)。

また、「する」と「行なう」が方向性、移動性に乏しい動詞であるのに対し、「やる」が基本意義として方向性、移動性のある動詞であるという点を、補足として指摘しておきたい。

(図4)



#### 4. 終りに

以上「する」「やる」「行なう」の意味的、構文的特徴を分析してその意味的構造の解明をしようと努めてきたが、結局、概略的な分析にとどまる羽目になったと思う。特に「する」の性格を十分に明確にするにはさらに深くかつ広範囲な研究が必要であると思う。本稿はただ「する」、「やる」、「行なう」という中国人の日本語学習者に混用されやすい基本語の意味特徴を紹介しただけで、日本語教育に即した語彙研究を期待しているものである。本稿が、もし日本語学習者や日本語教育者・研究者にいささかでも役に立てば幸甚に思う。

本稿を作成するにあたってご教示をくださった先生方とご協力くださった方々に深くお礼を申し上げる次第である。

#### 参考文献

1. 森田良行『基礎日本語』1 角川書店
2. 日本語教育学会『日本語教育辞典』大修館書店
3. 佐伯梅友、小松英雄『三省堂古語辞典』三省堂
4. 佐伯梅友他『例解古語辞典』三省堂
5. 金田一春彦『新明解古語辞典』三省堂
6. 新村 出『広辞苑』 岩波書店
7. 池田亀鑑『源氏物語大成・索引篇』 中央公論社
8. 安田 滋「日英語の比較」-「する」と「行なう」について-『日本語学校論集』2号、昭和50年（東京外国語大学附属日本語学校）
9. 李 奇術「する・やるの使いわけ」（在中国日本語教師研修センターの）『類義語論集』第四期（非売品）